

托児所のある村

小川未明

青空文庫

村は静かでありました。

広々とした、托児所の庭にだけ、わらい声がおこつたり、子供たちのあそびたわむれるさけび声が出て、なんとなく、にぎやかでありました。

よく晴れた、青い青い大空には、ぽかりと、一つ白い雲が、浮かんでいました。雲も、下のこのようすをながめて、うらやましがっているようでした。

若い保母さんも、元気でした。子供といっしょになって、かけたり、おどつたりしていました。くつをはいた子供、ぞうりをはいた子供、げたをはいた子供、いろいろでした。また着ているものも、さまざまでした。

けれど、そんなものは、だれの目にも入りません。ただ、みんなは、光の海を泳ぐように、かみの毛を風に波立たせ、たのしくて、しかたがないと、小さい胸をふくらませていました。

さつきから、いくたびか、つばめが、子供たちの頭の上を、とびまわっていききました。それを見た一人の子が、

「つばめも、おにごっこしているんだね。」と、いいました。

「そうよ。いいお天気だから、よろこんで、あそんでいるのよ。」と、一人の子が、こたえました。

これを聞いた保母の娘さんは、

「つばめばかりでなくてよ。ごらんなさい。あの木の枝がダンスをしているでしょう。」と、いいました。

「ああ、おかしい。ダンスだつて。」

「ほんとうだわ。よく見ると、おどつているようよ。」

こう、みんなが、まわりの木や、鳥や、草に、気をついたときには、はじめて、自分たちがうれしいときには、まわりのものが、やはり、みんなうれしく、たのしくあるのが、わかりました。

さつきから、すずめも、おしやべりし、わらったり、とびまわったりしていたし、花だんの、白い花は、いつもより、かおりが高かったし、赤い花は、とけて流れそうに、色つやをおびて、美しかったのです。

ああなんという、たのしい一時だったでしょう。そして、めぐみ深く、こぼれるようにてらす太陽の光と、さえずる鳥の声と、自然の子たち、子守歌のようにささやく風

の音より、この平和の世界を、じやまするものは、なかつたのでした。

みんなは、つかれたので、思い思いの場所で休みました。あちらのベンチに、こちらの芝生に、三人、四人というふうに。そして、保母の娘さんは、ひたいに汗をにじませて、子供たちにとりまかれて、休んでいました。

ちやうどそのとき、入り口から、男の人が、はいつてきました。顔見知りの役場のものでした。

「いそいで、やってきたから、汗をかいた。」と、いいながら、顔の汗をふきました。保母さんは、なんのご用があつて、そんなに、急いできたのかと、男の顔を見まもりました。

「東京から、お役人や先生がたがやっていらして、托児所をごらんなさるといふのだ。教育上のご参考に、なさるのだろう。もうじき、見えるだろうから、失礼のないように、知らせにきたのだ。」と、いいました。

若い保母さんは、どうしていいか、わかりませんでした。どぎまぎしながらも、子供たちにむかつて、はなをかめとか、きたない手をきれいにあらつてこいとか、注意しました。むじやきな子供たちも、先生が急にあらたまつて命令するので、どんなえらい方

たちだろうかと、さらおそろしいような感じがしました。

やがて、その人たちの足音と、こちらへ近づくと話しかけ、聞きました。もう、その姿が、そこへ、あらわれました。

男の役人は、ぴかぴか光った、勲章のようなものを、胸につけていました。そして、はいていくつも、上等のものともみえて、つるつる光っていました、また、洋服姿の女の人も、一行にまじっていました。その人の指には、ダイヤモンドが、かがやいていました。これを見た、瞬間に、つめたい空気が、あたりを流れました。

いままで、鳴っていたはずめの声も、聞こえなくなりました。青い空に浮かんでいた白い雲も、うすく消えかかりました。子供たちは、ただ、むしように、保母さんが、かわいいように思われました。

「さあ、なにかうたって、聞かせてください。」と、東京からきた女の人が、いいました。けれど、だれも、うたつてきかせようとはしません。

「ここでは、いつも、どんな遊びをするんですか。」と、黒い服をきた役人は、保母さんに、聞いていました。なんのかざりも、身につけていない娘は、顔をまっ赤にして、小さい声で、それに答えていました。

お客さまの一行は、花だんのまわりをひとめぐりして、外のほうへ出ていきました。ちようど、日がかげつて、赤い花の色は、黒く見えたし、白い花のかおりは、さつぱりしなくなつたのです。

画家が、托児所の小屋をとりいれて、新緑の木立を写生していました。役人や、学者の一行が、そのそばを通りかかりました。

「こんな、広々とした自然の中で、育つたのだから、もつと、明朗で、かつぱつに、うたつたり、おどつたりされなれないものかな。」

「なんだか、いじけているじやありませんか。」

「こんな、批評をしながら、過ぎかけたが、その中の一人が、ちよつと立ちどまつて、カンバスをのぞきました。すると、他のものも、いっしよに立ちどまりました。」

青年画家は、筆をとめて、彼らを見あげました。

「それは、あなたたちのほうが、むりですよ。」と、画家がいました。

「なぜかね。」と、きつとなつて、背の高い役人が、青年の顔をにらみました。

「こころの子供は、日ごろ、あまり、えらそうな人を、見ないからです。」

「なにも、われわれは、えらそうじやないだろう。」

「どこか、えらそうに見えるんですね。そんな人が、こわいんです。」と、画家は、いいました。

よく見ると、その青年は、右足は義足で、草の上に、松葉づえがおいてありました。「あなたは、この土地のものかね。」と、一人が、聞きました。

「この土地のものではありませんが、みんなの気持ちは、よくわかっていきます。お役人や、金持ちや、学者は、自分らの仲間でない。いつも上のほうにいて、命令するものだど、思っているから、きゆうに、いっしょになつて、わらつたり、話したりすることができぬのです。おそらく、大衆が、そうでしょう。いままで、上から、おさえつけられてきましたからね。」

「そういう君も、画家らしいが、展覧会にでも出品して、名をあげたいためでないか。」

「とんでもない。それは名誉欲の強い人のことです。私も上からの命令で、戦争にやらされ、生まれもつかぬ不具者となつて帰りました。しかし、自然は、いつ見ても平和で美しい。人間も、まちがった考えや、欲望さえもたなければ、たがいに、したしみあうことができて、美しいにちがいがありません。私は、風景や、生物の、たのしく

生存せいぞんする姿すがたをかいて、みんなにしめし、その喜よろこびをわかちたいと思おもうのです。」と、画が
 家かがいうと、黒くろい服ふくをきた背せいの高たかい役やく人にんが、きつと、青せい年ねんをにらんで、口くちをとがらし、
 なにかいおうとしました。そのとき、ダイヤをはめた美うつくしいお嬢じょうさんふうの女おんなが、
 「おや、ごらんなさい。私わたしたちがいなくなると、あんなに、子こ供どもたちが保ほ母ぼさんをとりに
 いて、元げん気きよく、さわいでいるじやありませんか。絵えかきさんの、おっしやることにも、
 真しん理りがあるわ。この問もん題だいについて、もつと研けん究きゆうしてみましようよ。」と、先さきに、口くち
 をきつたので、一どう同どうは、にぎやかな、わらい声こゑの聞きこえる托たく児じ所しょのほうを、ふりかえり
 ながら、立たちさりました。青せい年ねんは、いまのこともわすれて、ふたたび絵えの中なかに、たまし
 いを打うちこんでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「文学教育 第1集」

1951（昭和26）年10月

※表題は底本では、「托児所《たくじしよ》のある村《むら》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

托児所のある村

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>